

1880s~1890s 帝大、一高水泳部

誕生

1884年、東京大学水泳部が誕生する

「東京大学水泳部」は、1884年隅田川浜町河岸の中洲に学生が集まって水泳練習したのが始まりとされる。その後上流の吾妻橋の付近に練習場所を移した。86年に東京大学が帝国大学と改称したことに伴い「帝国大学水泳部」となった。87年練習場を逗子に開設した。さらに97年には、戸田村御浜に練習場を移転した。これは、当時学生であった篠田治索、栗林己巳の両氏が、伊豆沿岸を旅行し戸田を通過した際、戸田の海が水泳場に好適だと考えたことが発端だという。98年には、避暑中の皇太子殿下が戸田湾を遊覧された際、水泳競技中の水泳部員数名が殿下に招かれ、水着姿のまま拝謁したエピソードがある。

1894年、一高水泳部が誕生する

1886年に設立された第一高等中学校は、94年に第一高等学校となった。そして同年、神奈川県浦賀町大津に練習場を設け一高水泳部が誕生した。98年、練習場を千葉県館山北条海岸八幡浜に移転した。

帝大水泳部は一高水泳部の活動とかかわりを持ち、また新制東京大学水泳部は一高水泳部から多くの文化を伝承しているため、関係する事例についての一高水泳部の歴史を記述する。

1900s~1910s 日本初の水泳大会

主催部歌「狭霧」誕生

日本初の競泳大会を主催し、初の水球の試合を行う

1906年、一高水泳部は日本初の競泳大会である関東連合遊泳大会(20年まで開催)を主催した。07年、新渡戸稲造校長が館山に來訪されたとき、一高と東京高等師範学校との水球試合を觀戦された。この試合が我が国における最初の水球試合とされている。08年、八幡浜松林に独立寄宿舍が完成した。10年には水府流名手であった加福均三氏を競泳の指導者として迎え、神伝流と水府流の良いところを取り入れた一高流の泳法が作り出された。12年頃からは末広巖太郎氏が競泳の指導を行うようになった。

部歌「狭霧」が誕生する

1910年、一高水泳部 部歌「狭霧」が末広巖太郎氏作詞、加福均三氏編曲により誕生した。この「狭霧」が現在の東京大学水泳部 部歌である。

帝大が戸田にて日本初の水泳全国大会を主催する

07年水泳部からの要請により帝国大学が戸田に位置する御浜に地上権を獲得した。17年には水泳部が戸田で練習を開始してから20周年を迎えた。水泳部はそれを記念し、第一回全国競泳大会を戸田で主催した。この大会は我が国初の水泳全国大会であった。帝大は翌18年に優勝した。

1920s~1930s 河童踊り誕生プールの完成

部踊「河童節」が誕生する

1921年、一高にて“河童節”が誕生した。この河童節は東京大学水泳部に継承されている。河童踊りが初めて披露されたのは30年の記念祭であった。この河童踊りも東京大学水泳部に継承されている。一高は23年に練習場を伊豆宇佐美に移転した。25年は帝大の工学部タンクで練習した。25年、一高は帝大主

催の第一回本州東部高等学校聯盟水泳大会で優勝した。26年には、第二回本州高等学校聯盟水泳大会で優勝した。

大学間の競泳大会が多く開催される

1921年から始まった日本学生選手権大会に東大の松澤一鶴が出場して200米自由形、800米自由形に優勝した。帝大がチームとして初参加したのは23年で、7位であった。

25年に第一回東大対京大戦が東京の芝プールで行われた。34年からは北海道・東北・東京・京都・大阪・九州・京城の7大学が参加する全国帝大連盟水上競技大会が始まり、40年まで7回開催された。東大は7連覇を果たした。

駒場、二食下の両プールが完成する

25年に工学部の実験用タンクをプールとして使用できるようにし、そこで練習を行えるようになった。その後、暖房の排気の蒸気を入れ、上に布のテントを張ることで一年中泳げる室内プールが完成した。YMCA以外の唯一の屋内プールとして各大学の有力選手も来泳し、日本水泳の強化に貢献した。35年に本郷室内プール、38年には駒場プールが完成した。いずれのプールも松澤一鶴氏の尽力によるものであった。1940年に予定された東京オリンピックの公式練習

場を予定して作られた。本郷プールは競泳、水球、飛び込みができる室内温水プールとしてオリンピック合宿等に使われ、日本水泳界に貢献した。

水球リーグの新設を受け水球強化へ

練習は競泳水球半々程度で行われていたが、この時代、競泳の練習はタイムなどを特に気にせず、楽に泳ごうという気風だった。また、当時は水泳部としての組織が特にあるわけではなく、タンクで泳ぐ人間が部員であるという雰囲気であった。そのような中、競泳が強くなり、京大戦に勝利できる見通しが立ったことから水球も強化しようという話が出始めた。そして、30年から大学水球リーグ戦が正式に始まることを機に、29年の秋からは水球の練習を本格的に行うようになった。その際、当時関東で唯一水球専門のチームを持っていた慶応に指導を仰いだ。

32年のロサンゼルスオリンピックに村井清(同年3月卒業)が水球日本代表に選ばれ参加した。オリンピックで日本は4位であった。

飛込競技の練習については、38年から39年にかけて東京オリンピックの準備としてドイツよりフロントコーチが招かれ、前年のナショナルチームに学生

選抜選手を加えた 15 人に対し 6 月に 2 回、8 月に 1 回の合宿練習が二食プールで行われた。帝大からも川田稔、河野日出雄の 2 名が参加した。

同時期、競泳の練習は、石本巳四雄先生が指導した。

1940s~1950s 太平洋戦争新制大学の発足

東京帝国大学水泳部から新制東京大学水泳部へ

太平洋戦争初期、大学生は兵役を免除されたため水泳部としての活動は継続されていたが、1944 年に学徒動員が実施されたため選手不在となり、活動を休止せざるを得なくなった。やがて終戦を迎え、1945 年 9 月 10 日から活動を再開した。戦後教育制度が改革され、1949 年に新制東京大学が創設された。部員の主な活動場所が、新制東京大学生は駒場、旧制帝国大学生は本郷となり、本郷の一部選手が駒場の練習に時々合流する形となった。そして 1953 年、帝国大学が新制東京大学に完全移行することをうけ、本郷と駒場の両方のプールを一元的に使用する東京大学水泳部が誕生した。

1940年代当時より二食下プールの学内公開が始まった。二食下プールは1935年の完成当時より加温装置を備えていたが、燃料費の不足により、シーズンを通じて温水に維持されることはなかった。水泳連盟が二食下プールを使って合宿するときだけ、加温装置を稼働させ温水にした。普段は温水ではなく、部員は夏季に練習をするのみであった。

1951年1月には水泳連盟の古橋・橋爪を含むヘルシンキオリンピックに向けた強化合宿が行われた。帝大の野間隆彦も選ばれて参加した。

1953年にはアジア大会(5月・マニラ)の代表選考会と強化合宿が開催された。

全国レベルで戦う東大水泳部

競泳について、学生選手権では1946年から1956年までの間、1946、1952、1953年は全国上位6校のシード校として活躍した。他の年はシード校に次ぐ関東学生一部校であった。

個人では、1921年第一回学生選手権で松沢一鶴が、200米自由形、800米自由形に優勝し、同年の極東大会で440ヤードでも優勝した。1951年第27回学生選手権大会で野間隆彦が100米自由形に優勝、1965年第41回大会で藤島実が100米平泳ぎに優勝して、我が国トップレベルでの活躍を実証した。

1954年に全国国公立大学選手権水泳競技大会が開始された。第一回大会には数名が参加した。本格的に参加したのは第二回大会からで、同じく第2回大会から参加した東京教育大と優勝を争った。第2回大会から第11回大会までは東京教育大が9連続優勝し、第12回大会から16回大会まで東大が5連続優勝した。

水球については、1946年に関東学生リーグが復活した。1976年までは1部6チーム時代であったが、1953年まで1部で戦った。2部に転落しても翌年には2部で優勝し1部に昇格した。1955年からは1部8校に改編される1977年まで1部で戦うことはなかったが、2部2位以内に留まり常に全国大学上位8以内を維持した。

部誌「飛沫」を創刊する

1959年に、部誌「飛沫」と短信「河童便り」が創刊された。これらはOBと現役のつながりを強め、OBの現役支援に貢献することになった。

1960s~1970s プール常時温水化

東水会結成

二食下プールが常時温水化される

1960年以前、冬期の二食下プールの水温が低いことが練習の障害であった。

しかし1960年以降、二食下プールが常時温水化されるようになった。医学部ボイラー室からの蒸気の供給によるものであった。水温調節装置がなかったため、ボイラーマンのバルブの開け方次第で水温が決まった。このため、水温の上がらない時にはボイラー室に蒸気の供給量を増やすよう頼みに行くのがマネージャーの仕事になっていた。この温水化により年間を通しての活動が可能になった。また温水プールを持たない他チームとの水球合同練習など、水泳部に数々の恩恵をもたらすこととなった。

一方の駒場プールについては、1958年教養学部が体育実技の授業から水泳を除外して以来、大学によるプール管理が全く行われなくなった。このため水質管理、清掃に加えて外部侵入者排除・警備も水泳部員が行うようになった。濾過機が設置されないため水質の管理が困難になっていた。

1956年、初の女子部員が入部した。当時は女子学生の大会が開催されなかったこともあって女子部員の数が大きく増えることはなかった。1966年に学生選手権に女子の部が創設されたが東大女子がチームとして活躍するのは1985年頃からである。

国公立大学の中で強さを誇る東大

当時の戦績として、競泳については、全国国公立大学選手権は1965~1969年まで連続優勝した。1962年には国立七大学総合体育水上競技大会が開始され、1970年までに6回参加し、第1回大会を含め5回優勝した。

水球については、1951、52年のリーグ戦は1部(8校)で戦った。53年以降2部で戦うこととなった。そして72年には3部に転落したが、翌年2部に復帰し、76年には2部で優勝し1部に昇格した。また京大戦では水球は毎年勝利していた。

1968年には、大学紛争のため再び河童踊りが中止された。大学紛争で授業も行われぬ最中も、水泳部は二食下のプールで合宿を行っていた。

OB会として東水会を結成する

東水会の名称が出来たのは1960年代であった。この名称はもともと水泳部のチーム名であったがOB会の名称として自然に使われ出した。1967年に東大水泳部OB会に会長を置くことになりOB会の正式名称になった。

1961~63年ごろ、全国国公立に本格的に参戦し、国立七大学大会が創設され、遠征等が増えた。部員の遠征費負担が多額になり、負担できない部員も多かつ

た。このため、チームとしての活動資金が必要になった。そこで、OBに活動費の援助を働きかけることになった。

部誌「しふゝき」を年末に発行したり、短信「河童便り」を適時送付したりOBに積極的な働きかけを行い、部活動の現状を知らせる新しい試みを実施された。また部員が分担してOBを訪問して寄付を集めるようになった。部活動の費用にはOB個人からの寄付の他、企業からの寄付金、臨海水泳実習指導料、企業夏季公開プール監視員派遣料などを充てていた。

1980s~1990s 競泳水球分離河童

踊り中止

競泳陣と水球陣に分離する

1980年代初頭、多くの部員は水球を主として部活動を行っていた。練習は夜、二食下プールで行っていた。有志の部員が、午前中に駒場で競泳の練習を行っていたが、やはり水球の方が主であった。競泳は水球のシーズン終了後の6月中旬から本格的に行っていた。

しかし、女子部員の加入や、水球・競泳それぞれに打ち込みたい男子部員の存在がきっかけとなり、86年冬季、彼らによる二食下での競泳の練習が始まった。その翌年の87年には自主的に二食下のプールで朝練を行うグループができはじめた。そして88年、東大水泳部は競泳陣と水球陣の二つに分かれ、競泳陣は朝練、水球陣は夜練を行うことになった。

95年に二食下の埋め立て工事を行い、飛び込み用に5mだった水深を3mにした。

駒場プールはろ過装置が設置されないため水質維持が困難であったが、競泳陣の主練習が二食下プールで行われるようになって、さらに使用することが少なくなっていた。95年以降は全く使用しなくなった。

河童踊りが縮小され一時中止へ

1930年に旧制一高の記念祭で最初に行われた河童踊りは、東京大学駒場祭に引き継がれた。1959年駒場祭では第10回を記念して渋谷駅前まで行進して踊ったが、通常は学外に出ることはなかった。行進の後全員がプールに飛び込むようになったのは1953年頃からである。1980年代前半は3日間にわたって行っていた。1日目は学内、2日目は道玄坂、3日目はプールに飛び込むというル

ートであった。河童合宿が毎年戸田寮で行われ、部員はそこで踊りの特訓をした。88年から、河童踊りのルートが変更・縮小されはじめ、学外での踊りやプールへの飛び込みは禁止された。98年に、激しい河童踊りに抵抗感を示す部員により、駒場祭の河童踊りは廃止された。それに伴い、2000年には河童合宿も終焉した。3年後に駒場祭の河童踊りは復活するが、踊りの振付は完全には伝承されず、歌のメロディーなども正確に伝承されなかった。

東水会会則が制定され、会費納入義務が発生する

1967年に東大水泳部OB会の正式名称を東水会と決めた。その会則は1987年に作られた。御

殿下新プール完成にともない、二食プールが水泳部等団体使用専用プールとして存続することになった。これを受けてOB会が改装費用を寄付することになり、寄付手続き上、寄付者(東水会)を証明する必要が生じた。その目的で便宜上作成したものだった。

東水会会則が正式に決められたのは1993年であった。それまで会費の支払い義務はなく、現役がOBを訪問して寄付を集めていたが、会則が定められた1993年以降、OBの会費の支払い義務が定められ、組織立って現役支援を行うようになった。

競泳陣の女子部員が増加する

1987年ころ、女子選手として東大生・看護学生・他大生が数名ずついた。マネージャーも1名おり、女子部員の数が増えていった時期であった。競泳に対する関心が部内で高まっており、7月中旬~下旬には館山で夏合宿を行っていた。1990年代に入って夏合宿は廃止されたが、代わりに冬季に那須で2度合宿を開催した。普段の練習では主将が練習メニューを作り、二食下プールで7:00~9:00に朝練を行った。練習には他大の参加も歓迎された。新歓合宿は毎年GWあるいは6月に同窓会館で行われていた。

2000s~2020 情報化 女子陣結成

インターネットでの情報発信が盛んになる

21世紀の情報化の時代に入り、東大水泳部もインターネットを用いての情報発信や、OB・OG、他大学との積極的な交流を行うようになった。1999年に東大水泳部のホームページを開設した。2000年には現役と多くのOB・OGに配信されるさぎりメーリスを創設した。02年に現役によるメーリスでの活動報告

である河童通信を創刊した。その後 08 年に練習日誌発信のブログ、10 年に試合速報のための Twitter、12 年に情報交換の Facebook ページを開設した。

御殿下プール、二食下プール、駒場プールの状況

御殿下プールについては、03 年の二食下改修工事や、二食下ペンキ塗りの際を除いて、水泳部は部活動として使用していない。これは団体使用を認めないという御殿下プールの使用規則によるものであるが、もともとは、50 メートル室内プールを計画して、最終的に御殿下 25m プール案を決定するときに、二食下プールは水泳部等の団体使用専用として残すことを条件としたことに始まっている。また、1995 年以来使用されていなかった駒場プールは、駒場部室とともに 2009 年に取り壊された。

競泳陣で理論的な練習が行われる

練習計画は、部員が作成し、練習の進行は練習マネージャーが行う形が定着してきた。2000 年代初頭には、競泳と筋トレのプロコーチを有志の部員が自己負担で雇ったり、ソウルオリンピック代表選手を招いて練習会を開いたり、選手たちは最新のトレーニング技術や泳法を積極的に取り入れようとした。

一週間の練習計画は、(月)フォームや基礎持久力作り。(火)インターバル、スピード持久力練習。(水)朝はストレッチとドライ、午後はウエイトとフォーム。(木)~(土)はその繰り返しというように、メイン練習を週2回の頻度で行い、同時にフォームやテクニック練習も重視していた。陸トレも欠かさず、練習計画を練り効率のよいトレーニングを目標にした。09年には長距離専門のロング陣が発足した。この頃から練習計画は、最高学年が通年の方針を決め、日常の練習内容作成には20人ほどのメニュー陣が携わるようになった。メニューの良かった点・悪かった点を自由参加のトレーニングアナライズで分析し、メニュー改良に取り組んだ。2010年代からは1限用メニューが作られるようになり、2限用の練習時間は6:50~9:30と長くなった。

合宿等他大学との交流が盛んになる

2000年代から、新歓合宿では千葉国際水泳場で泳いだあと、検見川のセミナーハウスへ行くようになる。東大での合宿は、夏合宿の廃止を受けて年末に二食下で行うようになった。2003年11月には伊豆合宿、2008年9/15~17には富山遠征合宿があり、富山県選抜・成蹊大学の選手と共に練習をした。他大学との交流を増やして自分たちに足りないところを補うべく、2010年には有志が新潟合宿・名大合宿・JFEでの長水路練にも参加した。その後、新潟合宿が毎年

2月に行われ、2019年からは福島県の開成山しんきんプールにて2月に合宿を行っている。2019年には、埼玉大学、千葉大学との合同合宿を行った。

女子陣が結成される

2000年ころから、女子が次第に力をつけていった。それまで女子は退部する者も多く、なかなか人数が増えなかった。しかし、2008年に初めて全国国公立大学選手権(全国公)にリレー3種目で出場し、女子陣が結成された。女子の戦績はこの年から飛躍的に上昇し、翌年には東部国公立で団体権を獲得した上で全国公にリレー3種目出場した。2010年には個人50米自由形でインカレに出場したほか、全国公では400mリレーで決勝に進出、2012年には再び50m自由形と100m自由形でインカレに出場した。また、他大学生の女子マネージャーが初めて就任したのもこの時期であった。2014年には女子陣は国立七大学戦(七帝戦)で初優勝を果たした。2019年には東部国公立で再び団体権を獲得し、多くの東大記録を更新する年となった。

七大学戦に水球競技が新設され優勝

1959年創設された国立七大学戦(七帝戦)には水球競技が含まれていなかった。2009年第48回大会が東大幹事校で開催される機会に水球を公開競技として実

施した。2012年第51回大会で第一回の公式競技となった。公開競技時代を通算して4連覇を達成した。

普段の練習メニューは主将が決め、大会前はOBが決めていた。院生が試合にも参加できるようにするため、あるいは東京大学のロゴが入った水着を使えるようにするため、2005年、チーム名が東水会から全東京大学に変更した。水球の試合では、ベンチに決められた数の選手と監督が入る規則になっているが、全ての試合でOBが監督としてベンチ入りしている。

2000年代にはマネージャーが増え始めた。広島や京都で夏合宿を行い、個々の力とチーム力の両方の向上に取り組んだ。

2020年の現況

競泳陣は男子が選手21名、練習生2名、女子が選手4名、マネージャー3名(他大生2名)。

水球陣は男子選手12名、女子マネージャー3名(他大生1名)である。